

令和4年度 日本大学危機管理学部 個人研究費 研究実績報告書

所属： 危機管理学部 危機管理学科

資格： 専任講師

氏名： 上野山 晃弘

<p>研究課題名</p>	<p>ショーペンハウアー哲学と環境倫理学の諸課題再考</p>
<p>研究目的及び 研究概要</p>	<p>令和4年度日本大学危機管理学部個人研究費は、以下の研究計画を実行するために使用された。申請者はこれまで、ショーペンハウアーの自然哲学と倫理学に焦点をあて、その意義を現代の環境倫理の諸課題との関連の中で究明するための研究を進めてきた。その中で、ショーペンハウアーの自然哲学を、自然の価値や権利を素朴に前提する生命中心主義や自然中心主義の独断性を批判しつつ、同時に人間中心主義の暴力性を抑制するための新たな倫理モデルとして位置づけてきた。本研究の目的は、それらの研究成果をふまえ、さらに近年の地球環境危機の深刻化に伴って環境倫理学や公共哲学において新たに展開されている諸理論との関連も含めた上で、ショーペンハウアー哲学の意義を再検討し、その理論的・実践的可能性をさらに展開することをめざすことにある。以上の研究を通じて、危機の時代における哲学の意義と可能性を探究するということが本研究の目的として含まれている。</p>
<p>研究実績の概要</p> <p>研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等</p>	<p>【研究実績の概要】</p> <p>■研究の進捗状況 今年度は、ショーペンハウアー哲学に関する基礎文献と先行研究、および現代の環境倫理学や公共哲学関係の文献調査を中心に行った。進捗状況としては、予定通り文献読解を進め、考察を進めることはできたが、現時点で研究成果としてまとめるには至っておらず、期日までにはその成果を発表する予定である。</p> <p>■得られた成果 ショーペンハウアー哲学の現代的意義に関する研究成果として、現代の公共哲学を代表する思想家の一人であるサンデルの正義論との比較対照の中で重要な示唆を得ることができた。とくにサンデルが重視する四つの論点、すなわち「公共的意識の育成」、「経済至上主義からの脱却」、「貧富の格差の是正による道德性の回復」、「対話による相互理解の形成」は、素朴な功利主義や自由主義が招いた現代の危機的状況（行き過ぎた経済至上主義や個人主義の拡大によるコミュニティの崩壊等）を克服するために示された重要な課題であり、ここには近代初頭にショーペンハウアーがさまざまなかたちで展開したエゴイズム批判とも共通する問題意識が示されており、ショーペンハウアー哲学の現代的意義に関する考察をさらに発展させることができた。</p> <p>■今後の課題 近代初頭の哲学者たちは、激動の時代のただ中で新たな危機に直面し、自らの哲学を創造してきた。同時代に生きた他の哲学者たちとの比較対照の中でショーペンハウアー倫理学の意義をさらに精確に特徴づけること、またその現代的意義についてもさらに考察を進めることが今後の課題である。</p> <p>■研究実績等 今年度は、コロナ禍における対面型授業再開に伴う授業準備等に多くの時間が必要であったため、本研究課題の成果を発表するには至らなかった。期日までには研究成果をまとめ、学会発表等を行う予定である。</p>